

日本語オノマトペ語基の多義性について

On the Polysemous Nature in Japanese Onomatopoeia Bases

角 岡 賢 一

KADOOKA Ken-Ichi

キーワード

[オノマトペ (擬音語・擬態語)] Onomatopoeia・[語基] Lexical base

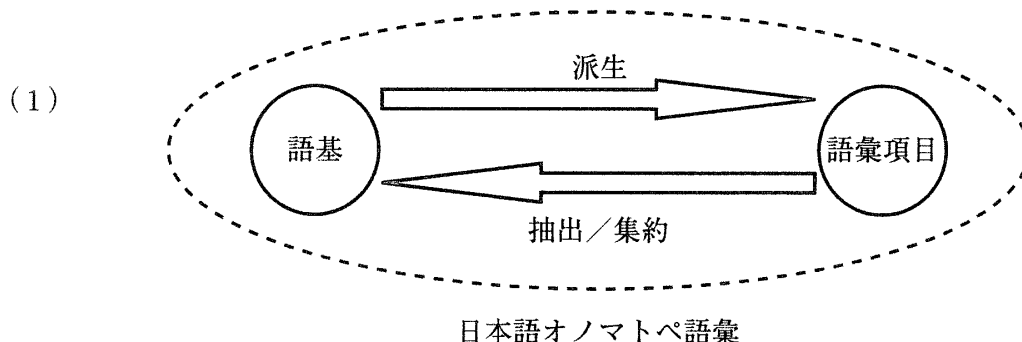
[派生] Derivation・[抽出] Contraction・[接辞] Affixes

1. はじめに

過去において筆者は「日本語オノマトペ語彙の体系性」という視点から、「語基」と「派生」という枠組みを仮定し、その枠組みに沿って日本語オノマトペ語彙全体を論じようと試みてきた (Kadooka (1993a, 2002b), 角岡 (2001a, 2002a))。そこで「語基」からの「派生」として定義されたのは書誌的に検証される歴史的現実という意味ではなく、共時的に共通性を有する語彙項目をグループに纏めるという考え方であった。本論文もその枠組みの延長線上に立脚し、日本語オノマトペ語彙を「語基を取り巻く派生形」という図式で分析を試みることとする。

本論文では、包括的に日本語オノマトペ語彙を網羅しているデータベースとして Kakehi, Schourup and Tamori (1996) を採用する。¹以下、この辞書を単に「データベース」として言及することとする。このデータベースの特徴などについては第3節で論じる。角岡 (2001a) は、日本語オノマトペ語彙の体系性を実証するための一つの試みとしてこの辞書の見出し項目を422の語基に集約してみた。この際、「集約」という過程は「派生」を逆向きに作用させた — あるいは語基を語彙項目から「抽出」した — ということも可能である。これを図式化すると次のようになるであろう。

1) 同書本文中において、日本語のローマ字表記は基本的にヘボン式に基づいている。特異な表記法としては、促音をアポストロフィで代用している点が挙げられる。母音の長音化は母音字を重ねている。撥音は普通に小文字の n で表記しているが、ナ行子音と区別するために「なかぐろ」(・) を後ろに置いている。本論文では、オノマトペ語基の体系性を強調するために訓令式のローマ字を採用し、促音・撥音・母音の長音化はそれぞれ「Q・N・R」と表す。



この図においても、角岡（2001a）での上述のような作業においても、「派生」「集約」と称しているのはいずれも共時的な過程としてであり通時的な意味合いは有していない。「派生」は日本語の歴史的事実として文献での跡付けによって検証されることはあり得るが、「集約」は角岡（2001a）で行われた理論的仮構である。もしもオノマトペ語彙という範疇を厳密に定義しようとすれば「しとど」「さめざめ」などKakehi, Schourup and Tamori（1996）に収録されている一部の見出し語について個別の語源的な検討は必要であるかもしれない。²しかしそのようなオノマトペ語彙の通時的分析を全面的に行うとなると本論文の枠組みから逸脱することとなるので注意しなければならない。

本論文で論じる問題点の中心となるのは、「日本語オノマトペ語基の多義性」についてである。この場合の「語基」の定義としては、上記で示したような語彙項目を集約したという狭義の範疇ではなく、上図（1）で示している点線の楕円の範囲を想定している。即ち「抽象的な」語基と、その語基から派生される個々の語彙項目双方を分析の対象とする。例を挙げてみよう。「はた」という語基には「旗など平面状の布が風に靡く音を描写する擬音語」の語義と、「突然気が付く」という場合の擬態語の用法がある。擬音語としては、実際の語彙項目は「はたはた」という反復型として表れなければならない。この場合の反復という過程を、促音や撥音、「り」などのオノマトペ標識と同列に捉えれば「オノマトペ語彙はなんらかの接辞が必要である」というように一般化することができる。しかし擬態語用法としては「はたと気が付く」のように語基のままの形で実現される。³純粹な語基としての「はた」では擬音語と擬態語の区別が付きにくい、辞書の見出し形としての語彙項目であれば、それぞれどのような音声や様態を描写しているのか明確になってくる。このような意味で「語基」を辞

2) 「しとど」の語源は「シトシト」「ヒタシヒタス」など複数説があるが、いずれにしても反復型が変化しようである。「さめざめ」もデータベースに採録されているオノマトペ語彙としては例外的に連濁されているが、本来は動詞語幹の反復型として一般語彙に分類すべき範疇であろう。筆者の個人的理解としては「しとど」は反復型「しとしと」の後半反復部分が変化したものとして捉えている。しかしこの説明では、他の反復形語類について同様の变化をした例が見られないことは念頭に置かれていない。これら語彙の語源について詳細は、角岡（2002a：47）の註20, 21を参照されたい。

3) 「はた」のように、語基のままに語彙項目として実現される語類を「語基見出し語形」と呼ぶことにする。語基見出し語形はデータベースで僅かに24しかない。これは、オノマトペ語彙にはオノマトペ標識が接辞されていることが「無標」であることを示している。語基見出し語形は、上記（1）の図で「語基」と表示されている語群がそのまま見出し形となっていることを体現している。この語類については、具体性—抽象性という尺度に関連づけて第5節で議論する。

書の見出し形すべてに拡大して把握するものとする。但し狭義の「語基」と言及する際にはその都度附言する。

ここで語基「はた」の第1子音/h/を有声化して/b/としてみると「ばた」という語基の形になる。この語基の反復型は「ばたばた」となるが、これには上記擬音語の「旗などの靡く音」⁴の用法と、「人など物体が倒れる様態」を表現する擬態語とが併存する。これは語彙項目における多義性の例である。

一般的に考えると、「語基」は個々の語彙項目を抽象化した結果であるから多義性が増すように思われる。果たしてこの仮説が正しいのか否かを検証するのも本論文の目的の一つである。上述したように、本論文では語基と語彙項目双方において多義性を検証してみるのもので、この比較は重要な意味を持つ。

以下第2節で語基・派生形・接辞についてこれまでの議論を総括し、第3節以降の議論の出発点とする。第3節では本論文が基本としたデータベースの性質について留意すべき諸点の指摘を行う。第4節でデータベースを通してみられる語彙項目や定義の数量的分析を行う。第5節で語基の抽象性と具体性という基準を設け、単義性／多義性との相関関係を探る尺度になるか否か、検証を試みる。第6節でオノマトペ語彙の多義性の本質に言及する。

2. 語基・派生形・接辞

第1節で簡略に述べたが、日本語オノマトペ語彙は「語基」に一定のオノマトペ標識を付加して個々の語彙項目を派生させることによって体系性を実現していると考えられる。多くの場合オノマトペ語基自体に意味が備わっている上に、特徴のあるオノマトペ標識が「一般語彙範疇ではない」ということを一層際立たせるような役回りとなっている。第5節で論じるように、語基見出し語形が1600以上の項目において僅か24と極めて少ないのは、オノマトペ標識が接辞される「派生」という過程が日本語オノマトペ語彙にとって事実上必須である傍証であると言える。この節では、語基－派生－接辞の関連について過去の議論を総括し、語基の多義性を論じる前提とする。その中で、接頭辞や接尾辞などを語基に付加する「接辞」は派生過程の一環であると見なす。

角岡（2002a）、Kadooka（2002b）で想定したオノマトペ標識は以下の通りである。但しA群・B群という区分はここで初めて行ったものである。

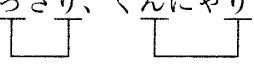
- (2) A群：Q（促音）、N（撥音）、R（母音長化）、「り」、反復
 B群：有声化、硬口蓋化、摩擦音化

A群の5種類は、Waida（1984）以来議論が積み重ねられてきたものである。一方B群の3種類は筆者が提唱している音韻的オノマトペ標識である。A群の5種類は個々の語彙項目で

4) 語基の子音が有声化されることによって、擬音語であれば物理的に音が大きい状態を表現する。擬態語では頻度、様態、物理的尺度などがいずれも大きいことを示唆する。擬音語、擬態語共に有声障害音を持つオノマトペ語彙は、多くの場合話者にとって好ましくない含意を持っている。

最低限1モーラを占めるのに対して、B群の音韻的オノマトペ標識は音素素性に影響を与えるものであり、語彙項目の音節数・モーラ数には関与しない。A群オノマトペ標識は「形態的」、B群は「音韻的」と分類することも可能であろう。詳細は角岡（2002a）を参照されたい。

一方、日本語オノマトペ語彙の接辞体系は次のように整理されている（角岡（2002a:56-59））。それぞれの接辞の種類と、例となる見出し形の一部を掲げる。

- (3)
- 接頭辞：あはは、わっはっは、うえーん、おほん
- 接尾辞：ぺちゃんこ、せっかち、ちょこなん、ぽつねん
- 接中辞：むんず、ざんぶ、どっか
- 接周辞：ばっさり、ぐんにゃり
- 

接周辞（circumfix）は定義上、離れて生起するので該当部を線で連結してみた。この点は、単独で生起する他の3つの接辞とは異なる環境となって実現される。接周辞が接辞される語彙群は、黒田（1967）の定義した「リ延長強勢擬容語」の類である。⁵接中辞（infix）は、3モーラ語形において第2モーラが促音または撥音という特殊モーラとなっている。この第2モーラを除外した形が語基である。例えば「むんず」の第2モーラNを取り去ると「むず」という語基が抽出される。これは、人体を含めて対象となる物体を荒っぽく掴む様態を示す語基である。

(3)のように概観してみると、日本語オノマトペ語彙には接辞も体系的に網羅されていることが窺える。即ち、どの言語においても普遍的であると思われる接頭辞・接尾辞だけではなく接中辞と接周辞についても存在が仮定されているという点において興味深い。接中辞と接周辞は形態論的に、世界の諸言語においては例が少ないと思われる。上掲(3)のように4種類の接辞がある特定の語彙範疇に見出されるというのは、他の言語や日本語のオノマトペ以外の語彙範疇で同様の例が見出されるか否かという観点から、類型論的あるいは対照言語学的な今後の研究課題として提起しておきたい。⁶

(3)で挙げた4種類の接辞のうち、接中辞・接周辞として付加されている撥音（N）・促音（Q）・「り」はいずれも、A群のオノマトペ標識と同一である。「ぐらーり」「そろー

5) 黒田（1967）の定義した「リ延長強勢擬容語」は、データベースに131語収録されているが5語を除き擬態語専門語彙、もしくは擬態語+比喩的用法混成（第4節参照）である。次の5語だけは擬音語専門語彙または擬音語と他の用法の混成である。（ ）内には用法を示す。

boQkiri (S), saQkuri (S), zaNburi (S), poQkiri (SM), baQtari (SMMF)

これら5例の擬音語用法語彙を検証してみると、偶然このような語形になった可能性が大きいと言える。それは、それぞれ共通の語基から派生される語形 — 擬音語であるから、同じ音を表現している語形 — が確認できるから断定できる。「ぼっさり」「さっくり」「ざんぶり」「ぼっさり」「ぼったり」に対しては3モーラ形の「ぼきり」「さくり」「ざぶり」「ぼきり」「ばたり」が対応している。

この分布からして、この語類はほぼ全てが擬態語であると分類することができるであろう。この類の語彙については、第6節で纏まった分析を試みる。

6) 「類型論的」とはある程度数に上る、異なる系統の言語を、各語族に属する絶対的な数の比率に応じて比較対照する方法論を念頭に置いている。対して「対照的」とは、そのような比率までは考慮に入れないで、単に異なる言語を比較するという前提に立っている。

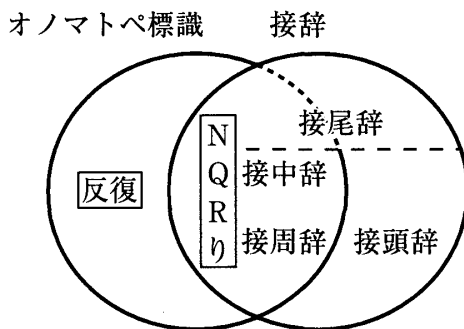
り」など強調形で多用される母音の長音化Rも同列に見なすことができる。他方接頭辞と狭義の接尾辞は、A群オノマトペ標識とは異なっている。

しかしここで改めて接尾辞の性質という観点から考えてみると、反復を除くA群オノマトペ標識も、語基に後続する場合は接尾辞と見なしてなんら差し支えはない。これら従来「オノマトペ標識」と定義されてきた「接尾辞」は生産性が高く、日本語オノマトペ語彙において「無標」であると考えることができる。しかし(3)で挙げてある「こ」「なん」「ねん」などは、それぞれ1例か2例しか出現せず、生産性としては非常に低い。N・Q・「り」のようにオノマトペ標識として定義されるか、あるいは「なん・ねん」のように「その他接尾辞」に分類されるかは、語彙項目として出現する頻度という相対的な差であると考えてよいであろう。

接頭辞については、全く事情が異なる。接頭辞は定義上語基に先立つ位置に接辞されるわけであるが、オノマトペ標識はそのような環境には生起しない。次に接頭辞が接辞される語彙範疇を見ると、「いっひっひ」「うふふ」「えっへっへ」などほとんどが笑い声を写した擬声語である。接頭辞の接辞される語彙項目として笑い声は15例挙げられているが、笑い声以外には泣き声の「うえーん」、咳払いの「おほん」「えへん」、馬の鳴き声「ひひーん」の4例しかない(角岡(2002a:58))。第3に「接頭辞」は、笑い声については母音と「わ」、笑い声以外では母音と馬の鳴き声「ひひーん」の「ひ」に限られている。⁷⁾以上の3点から判断して、接頭辞はオノマトペ標識とは全く異なった範疇であると分類できる。

この節のここまでの議論から、オノマトペ標識と接辞の関係を概念的に図示して総括してみよう。5つのオノマトペ標識は四角で囲んで接辞との区別を容易にするよう図る。

(4)



2つの円が重なり合っている部分が見づらいが、ここは4つのオノマトペ標識N・Q・R・「り」が接尾辞の一部・接中辞・接周辞として接辞されることを示している。接尾辞には(3)で挙げたようにオノマトペ標識ではないものも存在している。接頭辞はオノマトペ標識と重ならない。この図は観念的なものであって、例えば円の面積が語彙項目の数に比例している、というような意図は念頭に置いていない。

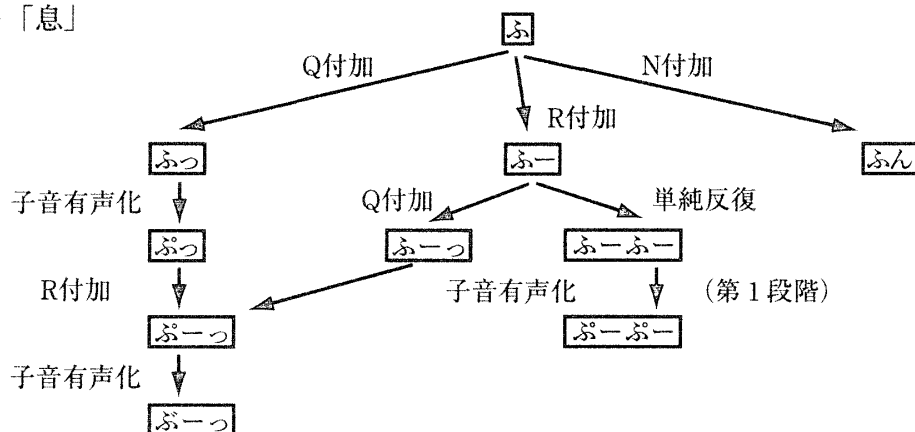
角岡(2001a)では先述のように、データベースの語彙項目1600余りを422の語基に集約し

7) 馬の鳴き声を描写する擬態語の語基としては「ひん」を仮定している。1モーラの「ひ」では馬の鳴き声という原音から乖離して抽象的すぎるであろう。「ひひーん」という見出し形はオノマトペ標識として3モーラ目のRと、接頭辞として語基「ひん」の1モーラ目「ひ」が接辞されたと見なす方が妥当であろう。

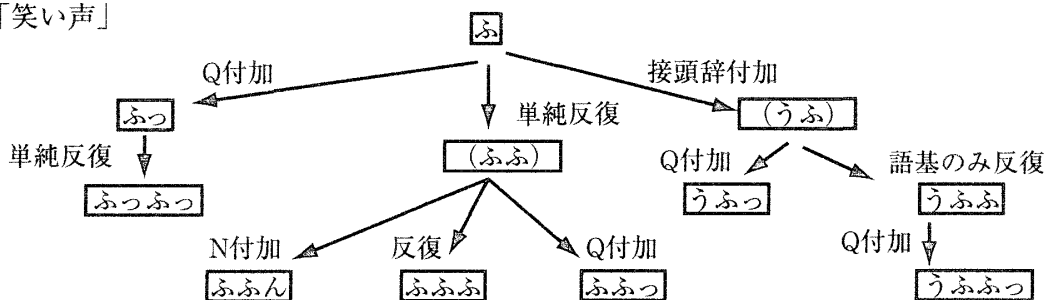
た。各語基では、集約される以前の語彙項目の数が最低1 — つまり語基そのものが辞書に収録されている語形（語基見出し語形）であり、その他の語形を派生する生産性がない — から最高24の範囲で分布している。ここでは、その最高の派生語彙項目数24を有する語基「ふ」を例にとって検証してみる。

語基「ふ」は、大きく類別して3つの様態を表現している。一つは他のハ行1モーラ語基「は、ひ、へ、ほ」と同じく笑い声を描写する擬声語としての用法であり、他方は「息の吹き出る音を表現する擬声語」の用法である。第3の語義として「ふと気が付く」という用例に見られるような「突然さ」を表す用法がある。この3つの定義からはずれるのが、豚の鳴き声「ぶーぶー」、臭いと怒りを表す擬態語「ぶん」、臭いの強調形である「ぶーん」の3語である。いずれも上記3つの定義となんらかの関連があるように直感的に考えられるのであるが、厳密に言えばこれら3つの音／様態の「隣接領域」に位置するということになるであろうか。⁸ひとまずこの3語を除外し、主要な3つの語義の多義性についても次節以降の議論に譲るとして、ここでは語基からの派生過程の分析に専念する。下図では、語形を四角で囲み派生過程と区別する。（ ）内は「理論的」に仮定されるものの、実際には語彙項目としては辞書に収録されていない、派生過程途上の「仮構形」である。

(5) 「息」

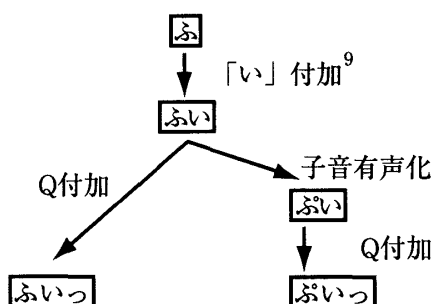


(6) 「笑い声」



8) 「ぶーぶー」は「ぶーぶー」をさらに有声化して得られる。擬態語「ぶん」の表現している「臭い」も、息のように空中を伝わるという共通点が見いだせる。これらの考察から3語の表現している音／様態を「隣接領域」と定義することが可能だと考えている。

(7)「突然さ」



ここでは表示の便宜上、語基を最上段に置いてそこから下方に矢印が向くように派生の過程を配置したが、語基を中心に据えてそこから四方八方に派生の過程が伸びるように図示すれば「語基を取り巻く派生過程」という趣旨により適切に合致したであろう。しかしこのような図示でも、一つの派生形（例えば仮構形「うふ」）から別の派生形が生じる（「うふっ」と「うふふ」）ことが体系的に示されている。さらに一つの語基（この場合「ふ」）から並行的に複数の派生形が生じる過程も、この図示によって直感的に理解できるであろう。このような表示において「語基」からの「派生」という枠組みを日本語オノマトペ語彙全体について説明に採用する妥当性が裏付けられたとすることができるであろう。

語基「ふ」から派生される見出し形の3つの群において、音韻的振る舞いとして子音/h/の有声化過程に関して違いが生じている。即ち、「笑い声」では有声化は適用されないのに対して「息」と「突然さ」の群では子音/h/が有声化されている語彙がある。例えば「ぶっ」「ぶい」である。しかも「息」を表現する擬声語群では/h/→/p/→/b/という3段階の無声-有声の対立が認められる¹⁰のに対して、「突然さ」では/h/：/p/の対立しかない。/h/→/p/→/b/という有声化過程において無声摩擦音/h/を基底として「無標」と考えているのは、この3つの子音を持つ派生語形で息の出方が最も小さい様態を表しているからである。「ふっ」「ぶっ」「ぶい」を比べてみよう。「ふっ」と息を漏らすのは、第3者に聞こえるか聞こえないぐらいの溜息だが「ぶっ」と吹き出す音は近くにいた者の耳に届くであろうし、「ぶい」という音は放屁音の描写である。この例において、/h/→/p/→/b/と子音が有声化されるにつれて描写／表現されている音声が物理的に大きくなっていることがわかる。同時に、有声化は一般的に好ましくない意味合いを含んでいる場合が多いということも指摘できる。「ぶい」という笑い声では「好ましくない様態」はそれほど強く含意されていないであろうが、「ぶい」という放屁音においては行為そのものが、社会通念上忌避すべき実態であると言える。

次にオノマトペ標識という観点から検討を行う。3つの意味群のなかで、語基「ふ」のまま見出し形になるのは「突然さ」を表す用法のみである。「息」と「笑い声」を描写する擬声語では、促音や撥音というオノマトペ標識なしでは見出し形とならない。しかし擬態語とし

9) 2モーラの語基に接辞されるオノマトペ標識は「り」であるが、この標識が1モーラ語基に接辞する際には「い」という音型となる。

10) /p/は音声素性としては[無声]であるが、日本語[ハ行音]の系列としては/h/の有声化と見なす。濁点を添えられる[バ行音]は、有声摩擦音/g, z, d/と同列で、正書法の観点からは一段階の有声化と考えられている。伝統的日本語学(国語学)の用語で[バ行音]を[半濁音]と称しているのは、/p/を音韻的に有声と見なしていることの証左となる。

てならば語基だけで語彙項目として成立する、というのは注目すべき特徴であるように思われる。

図示されたような派生過程においては、複数のオノマトペ標識（接辞を含む）が適用される場合、どの標識が先かという順序の問題が生じる。例えば「うふふ」という見出し形を派生させる際に、上図のように接頭辞「う」を接辞しておいて後に語基を反復したと考えるか、先に語基を反復して「ふふ」という仮構形として後で「う」を接辞したと仮定するか、2通りの可能性がある。上図においては前者の説を採用しているが、これは細かな検証を経たものではないことを断っておく。また（5）において「ぶーっ」を派生するのに、「ぶっ」にRを付加するのと「ふーっ」を有声化するのと2つの方途を示しているが、これは両方同程度であるという可能性を示唆している。これも詳細な検証によらなければ結論は出せないであろう。

3. データベース：3用法

この節ではKakehi, Schourup and Tamori（1996）をデータベースとし（以下単に「データベース」と言及することとする）、見出し語1600余りの項目中にどれぐらいの頻度で多義性が見られるのかを検証する。また、一つの見出し語にどれだけの多義性（異義性）が併存するのか、という分析も並行して行う。データベースにおける各語彙項目の数量的集計と分析は第4節で行う。

データベースでは、擬声語をS、擬態語をMとして表示し、それぞれに複数の用法がある場合にはS1, S2, M1, M2, 等と略示して区別している。この2大区分に加えて、Fig. という比喩的用法が見出しとして立てられている。この用法は定義上、擬態語の一部分と見なすべきであろうが、擬声語にも比喩的用法として見出し項目が設けられている場合もある。擬態語の比喩的用法は例えば「ばったり」の中に以下のような定義と作例が見られる。

（8） Fig: The manner of suddenly becoming ill or dying.

「大黒柱の父親に**ばったり**（と）倒れられて、一家は途方にくれ、挙げ句の果てに一家心中するという悲劇を、最近よく耳にする。」

見出し「ばったり」では擬声語としては「ばたっ」と共通で物が倒れる音、擬態語ではM1として「倒れる様子、誰かと偶然に遭遇する様子¹¹⁾」、M2として「ある状態が突然終わる様子」が定義されている。上記（8）の比喩的用法は同じ「倒れる」様態であっても「家計の中心となるべき人物が働けなくなる状態」について述べていることからM1とは別用法に分類したものと考えられる。

一方擬声語の比喩的用法では、銃声のような単発の大音量を描写する「ばーん」の中に次

11) M1の定義として「病などで倒れる様態」と「偶然の遭遇」という別々の、かなり異質の様態を盛り込んでいるのは筆者としては疑問である。なお、辞書での定義の説明は英語でなされているが、ここでの日本語訳は筆者による。

のような定義と引用が見られる。

(9) Fig: The manner of doing something decisively.

「何しろ重要な問題でも、バーンと一発で決められてしまいますからね。」¹²

ここでは、実際に「バーン」という音が聞こえるわけではない。寧ろ「物事を決める」という様態の描写であり、その意味からは擬態語に近いであろう。しかし「恰も掌で机を叩くような音声が聞こえるかのような様態」(筆者の解釈による)を描写したという観点から比喩的用法として分類したものであろう。

以下の分析においてはまず、このように比喩的用法を別項目としたTakehi, Schourup and Tamori (1996) の考え方を尊重し、S・M・Fの3区分で集計する。上述のように比喩的用法は擬声語・擬態語両方の見出しの後に含まれているが、以下で分析する際には擬声語／擬態語いずれの比喩的用法なのかを区別する。

ところで擬音語と擬態語の区別は、絶対的なものではなく相対的である。それは、物理的に音声が伴うか否かが必ずしも客観的ではないことに起因する。例えば「ばんばん」の説明では擬音語としては銃声、擬態語として「遠慮なく不平を言う様子」と定義されており、擬態語の用例として次のような作例が挙げられている (Takehi, Schourup and Tamori (1996: 21))。

(10) 「そんなにばんばん文句を言わないでくれ。(後略)」

「文句を言う」のであるから当然音声を伴っているはずであるが、この場合は擬音語ではなく擬態語として定義されている。「ばんばん」の擬音語／擬態語分類に関しては、大仰に不満不満を述べ立てる様態を重視して音声として聞こえてくる擬音語の側面を「軽視」し、擬態語と分類したのかもしれない。

もう一つ、「ぶるん」で検証してみよう。擬音語の語義として「エンジンの始動音」、擬態語では「一回震える様子」と定義されている。擬態語用例の引用として次の2例が挙げられている (*ibid.*, 154)。

(11) 「…モグ吉は、ぶるんと身ぶるいしました」

「静かに草をたべていた馬は、ハエでもそばにきたと思っただけなのか、耳をぶるんとふったきりでした」¹³

両例とも、動物が体を振るわせる様態を描写している。物理的には、動物の体が急速に動くのにつれてなんらかの音声が伴っているであろう。「体を震わせる」という様態を表現してい

12) この例の引用原典は鈴木健司『気配りのすすめ』(講談社刊、1982年)である。

13) 出典はそれぞれ次のように表記されている。

Naoko Awa, “Mogura no Ho’ta Fukai Ido” in *Minami no Shima no Mahoo no Hanashi*. 講談社、1980。

Atsuo Saito, *Booken-sha-tachi*. 講談社、1978。

るところから擬態語と分類しているのであろうが、上述のように音声をも伴っているという点から厳密に定義すれば擬音・擬態双方の語義を含んでいると考えて差し支えないであろう。しかし辞書での定義はそのような「曖昧さ」を排除し、すべての語彙項目について擬音か擬態のどちらかに割り振っている。

本論文がデータの原典として依拠しているKakehi, Schourup and Tamori (1996)は上下2巻本の体裁で日本語オノマトペ語彙を網羅した辞書であり、この分野では現時点で最も信頼が置けるものと考えている。¹⁴しかしこの辞書には、「齷齪」のように漢語起源でありながら見出し語として入れられている例もある。この語は通例、漢字で表記されることがほとんど無いために語源について日本語母語話者にとっても直感が働きにくい。¹⁵また音韻形態的には、全体が4モーラで2+2と分節できる日本語本来語オノマトペの「交替型」と偶然一致している¹⁶ために本来語の中に紛れてしまったものと考えられる。¹⁷

註14で指摘した欠落項目を算入しなければ、この論文で分析の対象としている見出し語彙数は1622である。この数字には「齷齪」が含まれていないが、「しとど」「さめざめ」という連濁例は含んでいる。

4. 数量的分析

この節では、データベースに収録されている語彙項目について、定義されている擬音語・擬態語・比喩的用法について数量的分析を行う。その目的は、ある語彙項目が擬音語または擬態語として一つの定義だけなされるのか、あるいは複数の語義を持つかを定量的に明らかにしようというものである。比喩的用法は、擬音語または擬態語から副次的に転用されるもので、擬音語や擬態語のとしての「本来」の用法なしに比喩的用法だけが見られるということとはあり得ない。擬音語／擬態語／比喩的用法の複数に跨る場合の集計、また語義の定義がどのようになされているかという側面も定量的に分析することによってオノマトペ語彙が客観的に把握できるであろう。

以下が分析の集計結果である。小計欄で（ ）内に表示されている数字は、全項目数1622に対する百分比である。左から1列目と2列目の上部は擬音語、擬態語のみの定義がなされ

14) 同辞書作成の過程で筆者が作成した独自のデータベースと照合した結果、「てんやわんや」のように「当然収録されているべき見出し」で若干の欠如が発見された。以下、これらの語彙を「欠落項目」と呼ぶことにする。

15) これは日本語やまことば系のオノマトペ語彙と漢語起源の「擬似オノマトペ語彙」(下記註16, 17を参照されたい)との狭間にある陥穽であろう。

16) 「齷齪」は全体が4モーラであり、前半2モーラと後半2モーラに「分節できそうな」構造である。前半と後半の2音節目が「あく・せく」と共通であるところから、表面的には「てきばき」などの交替形と全く同じ構造である、と言える。このように、漢語で各文字の韻が同一である2字以上の成語を中国語学の伝統では「疊韻」と称している(角岡(1993b)参照)。Kakehi, Schourup and Tamori (1996)では「齷齪」の意味の定義として擬態語の用法を1つだけ与えている。

17) 「齷齪」のように漢語起源でありながら、恰も日本語本来語オノマトペのように流通している語彙を角岡(2001b)では「かな擬似オノマトペ」と定義し、正書法と母語話者の直感という観点から論じている。Kakehi, Schourup and Tamori (1996)も論じているように、日本語においてオノマトペ語彙と一般語彙の区別は母語話者にとって比較的容易であるが、その例外となるのが、かな擬似オノマトペである。

ている語彙の集計である。これらをそれぞれ「擬音語／擬態語専門語彙」と定義する。専門語彙以外は、「擬音語＋擬態語用法混成語彙」「擬音語＋比喩的用法混成語彙」などと呼ぶことにする。1／2列目の下部は擬音語＋比喩的混成用法と擬態語比喩的混成用法、3列目は擬音語＋擬態語混成用法、4列目は3用法混成語彙である。3列目の集計は、2用法混成語彙を合計したものである。

(12)	S	478	M	619	SM	135	SFM	7
	SS	19	MM	133	SMM	32	SFMM	5
	SSS	1	MMM	29	SMM	13	SMF	12
			MMMM	1	SSM	8	SMMF	12
			MMMMM	1	SSMM	2	SMMFF	1
小計		498		783	SSMMM	1	SMMMFM	1
		(30.70%)		(48.27%)	SSMMM	2	SMMMMF	1
					SSSM	2	SMMMMMF	1
	SF	17	MF	49	SSSMM	1	SSFM	4
	SFF	1	MFF	1			SSFFM	1
	SSF	3	MMF	20			SSMF	1
			MMFF	5			SSMMMF	1
			MMMMF	1			SSSFMF	1
						293 (18.06%)	48 (2.96%)	

百分比率で見て最も多いのは擬態語としてのみ収録されている783項目で、全体の半数近くの48%余りを占める。続いて擬音語だけの見出し形となっている498語彙が3割強である。この両者のみで全体の78.97%と8割近い比率になる。2用法以上の定義がなされている語彙（擬音語＋擬態語用法混成語彙）は全体の2割強という比率となる。これらを総括すると「日本語オノマトベ語彙の約8割は擬音語または擬態語いずれかの定義しかなされない語彙である」と言うことができる。

これら擬音語・擬態語専用語彙においてさらに特徴的であるのは、語義が1つしか定義されていない語が圧倒的多数であるという点である。擬音語では、語義が1つしか定義されていない語が498語中478（95.98%）、擬態語では783語中619（79.05%）という高い比率を示している。擬音語の方がより占有率が高いのは、擬音語は物理的に自然界の音声を描写するという具体性のためと考えられる。このように語彙項目と語義が1対1で対応していれば、オノマトベ語彙だけでどのような音声・様態を描写しているかという表現力が高くなる（田守（2002）はこの点を詳述している）。双方を合計すると、語義が1つしか定義されていない語彙項目は全体1622語中1097（67.63%）と3分の2以上の比率となる。これらの語を「単一語義語」と定義する。

さらに擬音語と擬態語の差に関して数量的に興味深い比較を行うことができる。それは、同一項目における異義性は擬音語専門語彙においては最大3である — SSSがその場合に相当する — のに対して、擬態語専門語彙は最大5までである（MMMMM）という違いである。

SSSという3つの異義性が定義されている擬音語は「ことこと」ただ1例であり、その語義は「軽い笑い声」「硬い物が接触して立てる音」「煮物を料理する際に出る音」である。一方、5つの語義を持つ擬態語は「ぐっ」である。定義は以下の通りである（定義の日本語訳は筆者による）。

- (13) M1：瞬間的に力を込める様態。飲み物を飲み干す様態。
 M2：なにかが突き出る様態。
 M3：感情が籠もる様子。
 M4：言葉などに詰まる様子。
 M5：数量が増減する様態。

これら5種類の様態の共通点について、語基の抽象性という視点から第6節で再び議論することにする。

このように異義性の多寡に関して擬音語と擬態語で差が見られる特徴に関連して、擬態語では語義が1つしかない語類から5つの類までの通減率が緩やかである点を指摘することができる。擬音語においてはSからSSSまでの項目数が478-19-1と急減するのに比べて、擬態語ではMからMMMMまでの通減率は619-133-29-1-1となっている。つまりS1のみ定義されている語に比べてS2まである語の数が25分の1以下に激減するのに対して、M1とM2の比率は約5:1と、比は小さい。これは擬態語の語基が相対的に、同じ音型であっても多様な異義性を有していることの示唆となっている。言い換えれば、擬態語語基は抽象性が高く一つの語形で多くの様態を示唆する、というように考えることもできる。さらにSSからSSSへの減少率が19:1と「激減」とでも言うべき状態であるのに比べて、MMからMMMへは約4:1（133から29）と緩やかな減り方である。

このように多義的な擬態語と対照的に、意味範疇として語義が極めて狭く特定されているのは動物の鳴き声や楽器の音を転写する擬音語の類である。「こけこっこー」「ひひーん」「びーちくばーちく」「びーひゃら」といえばそれぞれ鶏、馬、雲雀、笛の音声を表現しているという可能性以外はまず考えられないほど、音型と意味の対応は限りなく1対1に近い。もっともこれは「でっぷり」「どぎまぎ」「あんぐり」など単一定義しか示されていない擬態語においても該当する。これら擬態語においても語形と意味との対応は厳密であるから、「音義対応は擬音語のみに固有である」とは言えない。しかし(12)の数量的分析から窺える傾向として、擬音語における単一語義語の多さには注意を払うに値すると思われる。擬態語と擬音語で特定の意味範疇対応に関して有意な差があるか否かの検証はもっと厳格になされなければならない。

(12)に示したように、擬音語／擬態語専門語彙項目では1つのパターン（例えばS, M, MMなど）に含まれる語彙数が多いのに比べて、比喩的用法を含めて3つの区分すべてに跨る語（擬音語＋擬態語＋比喩的用法混成、最も右側の列の語類）の少なさが際だっている。この分類においては、パターンの数は多い反面で各パターンは最も多い場合でも12に留まる。加えて、1例ずつしか語彙項目のないパターンが8と、あるパターンに分類される語彙項目数が分散している。このことは、比喩的用法＋擬音語混成あるいは比喩的用法＋擬態語混成語彙が、擬音語／擬態語専門語彙に比べて少ないと指摘することができる。この原因は、少

なくとも2つ考えられる。第1は比喩的用法が擬音語なり擬態語本来の定義に付随するもので、比喩的用法単独に定義されることはないという点である。第2は比喩的用法の例がデータベース全体で154と絶対的に少ないという点である。

擬音語＋擬態語＋比喩と3種類の用法を網羅している48語彙（表（12）の右の列）は、「多品種」であるが各パターンは項目数が少ない。この範疇においても、ある語に定義される擬音語または擬態語用法の最大数は、それぞれ3と5である。しかし擬音語、擬態語、比喩的用法それぞれの定義が加味されるので、一つの語基の異義性は多様になってくる。SSSは「ぴりぴり」という見出し（SSSFMM）で、MMMMMは「がたがた」（SMMMMMF）において定義されている。「がたがた」は擬音語＋擬態語＋比喩の3用法を合計して7種類の定義がなされており、データベース収録の項目中では最も意味が多様である。次にその語義を掲げる（日本語訳は筆者による）。

(14) 「ぴりぴり」

S1：笛の音のように、継続的で高音の擬音。

S2：薄手の布や紙が連続して破られる音。

S3：窓ガラスなどが軽く振動する音。

F：人の声が室内などで反響する音の様態。

M1：電気による衝撃や辛い料理などによる鋭い痛みや感覚の様態。

M2：神経が鋭敏になっている状態。

(15) 「がたがた」

S：固い物体が接触して立てる物音。

M1：（機械やモータが）なんらかの不具合によって、速く短い周期で揺れたり震えたりする様態。（人が）恐怖や寒さ、神経的に震える様態。

M2：修理が必要であることを示す。どこかが緩んでいる事を示唆する。

F：秩序だっていない、あるいは乱れている様子。

M3：出来事や物がスムーズに進行しない様態。障子や木の抽斗が動きにくい状態。物の動きについては、擬声語を伴うことも多い。

M4：激しく不平を言ったり、なにかに強く反対する様態。

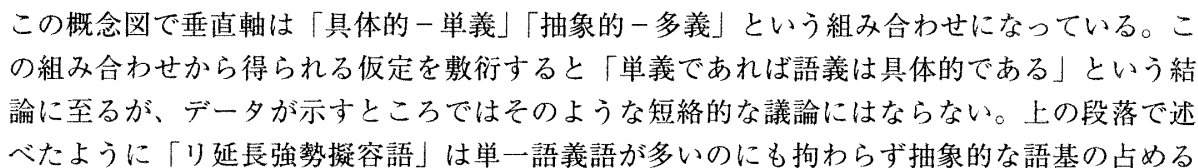
M5：なにかが突然、劇的に落ち込んだり崩壊する様態。

「がたがた」の比喩的用法はM2の後に置かれているので、「修理が必要である」という定義を、特定の機器類に限定せずに社会一般にまで拡げて表現していることになる。データベースでは便宜上、擬音語の比喩的用法は見出しSの後に、擬態語の比喩的用法は全てのMの後に置いているが、この論文では（12）のようにFは一括してSとMの後ろに置いた。

M3の定義は、擬音語と擬態語の境界について興味深い実例となっている。いずれも辞書編集者の作例である。

- (a) のような状態では玄関の戸が立てる音として実際に聞こえてくる可能性が高いが、(b) は純粋に擬態語としての性質が強い。国会で「円滑な運営がなされていない」という様態は、物理的音声に伴うとは考えにくいからである。(a) のような設定では、この玄関の戸はドアではなく和風の引き戸である、という推測まで可能である。このように日本語オノマトペは、事物の描写において具体的かつ詳細である。仮に (a) を擬音語とすれば (b) はその比喩的用法と定義しても差し支えないであろう。(16) の例も、第 3 節でみたように擬音語と擬態語の境界が絶対的な基準によって決まるものではない、ということの例証となっている。

そのような、字義通りの「抽象性」の他にここで新しい基準を提唱する。それは語義の単義性－多義性と具体性－抽象性を組み合わせることである。「語義の単義性／多義性」とは、ある語基の定義が一つだけか、あるいは複数なされるかという基準である。2つの軸を重ね合わせて概念を図示すると次のようになる。



— 36 — 龍谷大学国際センター研究年報(2003)第12号

比率が高いと思われるのは、その証左の一つとなるであろう。語基の抽象性、多義性ともに客観的かつ数値化できる基準が必要であると思われる。

ここでは、一般的な意味での「抽象的－具体的」という尺度で擬音語と擬態語を対比させる。擬音語には物理的（すなわち「客観的」とも言える）音声を言語的に表現する必然性において「具体的でなければならない」という前提が成り立っているように考えられる。対照的に、註5で指摘したように「リ延長強勢擬容語」では131例中126までが擬態語専門もしくは擬態語＋比喩的用法混成であり、抽象的な語基が多いと予想される。語基の形では意味が不明確なものをデータベースから抽出し、以下に2モーラの形で表示する。例えば語基asaは「あっさり」から抽出した語形、doyoは「どんより」が元になっている。「語基として意味が不明瞭」という判断は最終的には筆者が下しているが、以下の一覧を見る限りそれほど個人差は出ないように思われる。見出し語形を復元するには、語基の2モーラ目が無声障害音であれば語基の間にQを、有声音であればNを挿入し、4モーラ目として「り」を加える。

- (18) asa, doyo, gaka, gena, gisi, goso, guna, gunya, gusu, huku, hyoku, kaki, kati, kika, koga, komo, mata, miti, nope, oto, puku, sapa, sika, siku, sipo, soku, suka, suna, tama, topu, tyaka, tyoki, uza, uto, yuku, yuta, ziku, zugu, zupu

他の語形と比較していないが、131例中(18)のように39もの語基が抽象的であるというのは、かなり高い比率であるように考えられる。このように抽象的な語基のみ纏めてみると、語基の形と、「2モーラ目にQまたはN＋4モーラ目に「り」」という枠を嵌めて「リ延長強勢擬容語」の語形に「仕上げた」場合に「飛躍」があるように感じられる。つまり語基の形では抽象的で、どのような様態を表現しているのか不明確なのに「リ延長強勢擬容語」という語形では明確に様態が表示されていると感じられるのは、どのような作用に因るのか——そもそもオノマトペ語彙は共時的に見るべきであって、「派生」や「抽出」というのは言語学的仮構であると考えれば、この問い自体は無意味なのかもしれない。しかし他の語形においては語基だけでも意味は良く表されるのに、リ延長強勢擬容語に限って抽象的な語基が多いというのは一考に値するように思えるのである。今の段階では確かなことは言えないが、敢えて根拠を挙げるとすれば「接周辞を接辞したこの特殊な語形の所以」ということになるであろうか。この仮定の根拠として思い当たるのは、第2節(3)で列挙した接辞の一覧である。接周辞以外の3つ（接頭辞・接尾辞・接中辞）は単独で生起するが、接周辞だけは離接した位置での2種類の接辞の組み合わせという複雑な構造である。これが「接周辞の抽象性」と結びつくのかもしれない。より綿密な検証は別の機会に譲る。

(18)に挙げた39例は、4例が擬態語＋比喩的用法混成で他の35は擬態語専門語彙である。その35の擬態語専門語彙のうち30例までが単一語義である。単一語義ではない9語について、さらに細かい内訳を提示してみよう。

- (19) MMMM: saQpari MMM: aQsari MM: soQkuri, suNnari, yuQkuri
 MMF: siQkari, toQpuri MF: koNgari, siQpori

これら「リ延長強勢擬容語」中の擬態語専門語彙と上掲(12)で分析された全体の比率を対比させてみると、(12)においては擬態語専門語彙783のうち79.05%が単一語義であったが、リ延長強勢擬容語では35例中30(85.72%)と多少高い比率を示している。擬態語専門語彙に対する擬態語+比喩的用法混成語彙の比率も見ておくと(12)では783:76(13.03:1)に対して、リ延長強勢擬容語では35:4(8.75:1)である。やはり比喩的用法混成語彙が相対的に多いという結果になっている。

第2節(2)で示したA群オノマトペ標識は、原則として各語彙項目に対して1つずつ接辞されるものである。そのように派生される以前のオノマトペ語基はいずれも、具体性に富み語基だけでどのような様態を描写しているのか直観を働かせることができる。典型的には反復型の基となる語基についてこのことが該当する。つまり反復型語彙においては、反復される以前の語基のままの形だけで十分に具体性を帯びているのである。

しかし、そのような「語基は具体的である」という仮定の体系的な例外となるのが「リ延長強勢擬容語」である。このようにリ延長強勢擬容語だけに限定した観察であったが、この語類に限定する限り「一般的な意味での抽象性は単一語義の語類において多い」という結論が得られたかに思われる。

語基の抽象性について、もう一つ興味深い語形のグループが存在する。それは「語基見出し形」語類である。この類の語彙は「語基と見出し形の境界」という観点からも問題を提起しているように思われる。以下に、データベースで挙げられている当該語彙を列挙する。

- (20) biku, bon, bun, den, gaba, gan, gusya, hata, hisi, hita, hu, kaa,
 kata, kon, muzu, pan, pin, pon, soyo, tin, tira, ton, tu, wan

データベースには、語基のままで語彙項目として実現される用例は僅かに24しかない。これら24例のうち、1モーラ語基は「ふ、つ」の僅かに2つである。残りの22語は2モーラであるが、1音節と2音節のものがある。以下に述べるような理由で、2音節の形がオノマトペ語基として無標であり、1音節語基は例外的である。1音節・2モーラ語形のうち、2モーラ目が「ん」でない「かあ」は鳥の鳴き声を模した擬音語である。「びく」「がば」など2音節語基10語が/CVCV/という音素配列でそのまま見出し形となっているのは、オノマトペ標識の付加によって見出し形となる語彙が圧倒的に多いという点から例外的である。しかしこれら10語は偶然にオノマトペ標識が接辞されていないだけであって、語基としての具体性/抽象性には他の2モーラ語基との根本的差は認められないように思われる。

ここで「語基の抽象性」という観点から採りあげたいのは、2モーラ目に「ん」が配されている11語である。この語形の語基「ほん」や「がん」においては一見オノマトペ標識Nが接辞されているような外観を呈しているが、「ん」を除去すると「ほ」「が」という音型しか残らず、抽象的すぎて描写している実態が復元できなくなってしまう。従って、語基の形としては「ほん」「がん」など1音節・2モーラの形で考える。2モーラ目の「ん」はオノマトペ

標識ではなく、語基の一部である。犬の鳴き声「わん」も同様の理由でこのままを語基と仮定せざるを得ない。

これら24語彙項目に共通するのは、これらは「固定された表現」あるいは稍「古風に響く」という位置づけであり、データベース中での数自体が少ない。語基 — 派生形という関係で位置づけられる他のオノマトペ語彙とは異なった振る舞いをする、と結論づけることができるであろう。これら語基の「特殊性」の要因の一つに、見出し語形から抽出した後の1モーラ語基の稀少性を挙げることができる。角岡（2001a:62）の集計では、1モーラ語基は44例と報告されている。2モーラ語基は378ということになるから、比率で言えば約1：8である。

6. 多義性の本質

この節は「なぜオノマトペ語基に多義性が見られるか」という課題について論じる。これは、本論文の根幹に関わる重要な問いかけである。

まず、第2節から第5節において、具体的に例として挙げた語基の多義性について振り返ってみよう。

第2節で「24の派生形の基となる語基」として紹介した「ふ」は、大きく分けて3つの様態に集約できた。擬音語としての「息」と「笑い声」、そして擬態語としての「突然さ」の様態表現である。擬態語としての2つの定義は「笑い声も息を吐くことによって生じる」と考えれば一つに纏めることが可能である。しかし擬態語として突然さを表す語基「ふ」は、吐く息と関連づけるのは論理的困難が伴うように思われる。そうすると共時的には擬音語と擬態語とにおいて別々の語基「ふ」を仮定する、という選択肢が有力となってくる。この場合は、擬音語語基「ふ」が呼気を伴う音声の描写、「突然さ」を表現する擬態語語基「ふ」はその定義と全く無関係として分離する方が合理的である。その意味で、擬音語と擬態語両方の範疇を統合した大きな括りとしての語基「ふ」には少なくとも2つの独立した定義がされるべきと仮定するのが自然である。語基「ふ」のかたちでは「ふと考える、思いつく」という擬態語における「突然さ」という様態しか連想できない。「吐く息」や「笑い声」を表すためには、Q・N・R・「り」・接頭辞などの接辞が必要である。1モーラ「ふ」から「突然さ」という定義に結びつけるのにはさほど飛躍はないので、擬態語「突然さ」の意味に関しては抽象的とは言えないであろう。しかし「吐く息」と「笑い声」については、語基「ふ」のままでは見出し形とならず、なんらかのオノマトペ標識の接辞が必要であるという意味で「語基のままの形では抽象的である」という結論に至るかもしれない。

第4節で数量的に分析した結果、日本語オノマトペ語彙の約3分の2が単義語であるという事実が明らかになった。残りの約3分の1が多義語である。比率として、オノマトペ語彙3語のうち1語は多義語ということになるから、多義性の分析は重要な問題と言える。以下では語形という形態論的観点と、音象徴性と関連させた音韻論的見地、さらに擬音語と擬態語の区別という意味論的立場、この3つの視点で議論を進める。

まず語形について。Kakehi, Schourup and Tamori（1996: xx）が述べているように、日本語オノマトペ語彙の典型的な語形は以下の3つのうちのいずれかである。C,Vはそれぞれ子音と母音を表しており、CVは1モーラの語基となる。

- (21) A. Reduplications¹⁹
 B. CV (Q/N) CVri
 C. CV (CV) Q/N

本論文や角岡（2001a,b, 2002a）での表記と対応させると、A群は反復型と交替形、B群はQまたはNが挿入された場合が「リ延長強勢擬容語」、それ以外は2モーラ語基にオノマトペ標識「り」が接辞された語形、C群は1／2モーラ語基にオノマトペ標識としてQまたはNが接辞されている語形を示している。日本語オノマトペ語彙の全項目のうち、これら3パターンから外れているのは概算で100あまりに過ぎない。このように限られた外形の「枠」で規定されるというのが、日本語オノマトペ語彙の大きな形態的特徴である。この3つのグループに共通しているのは、全て第2節（2）で定義されたA群オノマトペ標識が含まれているという点である。

音素レベルでの音象徴がオノマトペ語彙にとって大きな特徴の一つであるのと同様に、形態論的レベルで（21）のような「枠組み」がオノマトペ語彙を「規定」していると言える。これは日本語のみならず、中国語や英語といった系統の異なる言語においても多かれ少なかれ観察される特徴である。例えば中国語においてはAABB, ABABという反復型や、部分的な反復であるABBなど「オノマトペ」的な語彙に形態論的特徴が見られる（Kadooka（2000））。また英語ではA-ety A/A-ity Aという固有のオノマトペ語形が報告されている（田守・スコウラップ（1999））。しかしこれらの語形が日本語におけるような一大特徴であって、語形だけでオノマトペ語彙であるか否かが即刻判断できるような材料であるかは別問題であろう。これについての検証は、他言語における数量分析を含めて今後の課題としておく。

次に、オノマトペ語彙特有の音素に関する特徴について論じる。上掲（21）でも示されているが、オノマトペ語基としては1モーラもしくは2モーラのCV (CV) という形が規範である。2モーラ語基が無標で、1モーラの形は有標と見なす方が妥当であろう。Hamano（1998）が日本語オノマトペ語彙の音象徴に関して詳細に考察しているように、語基としてどのような音や様態を表現しようとするかに関して最も重要なのは第1子音である。この第1子音の位置には、障害音が立つことが圧倒的に多く、そのような語類が事実上「無標である」と言うことができる。データベースの見出し項目で見ると、無声障害音/h²⁰, k, p, s, t/で始まるページが他を圧して多い。しかも、障害音は無声と有声の対をなすので、障害音以外の子音/m, n, r, y, w, φ²¹/が第1子音として立つ語彙は相対的に少なくなる。有声障害音/b, d, g, z/

19) ここで定義されている Reduplication には、角岡（2002a : 35）の分類では「交替形」となる「むしゃくしゃ」「かさこそ」などが含まれている。

20) 日本語子音で/h/に対応する有声音素は存在しない。しかし、オノマトペ語彙の音韻体系上は/h/—/p/—/b/という3種の子音が組を成している。調音素性的には/h/は喉頭摩擦音、/p, b/は両唇閉鎖音と全く共通点はないが、日本語正書法では「は」—「ば」—「ぱ」など、濁点・半濁点によって関連づけられている。従ってここでは/h/が基底で/p/が第1段階の子音有声化によって派生され、さらに第2段階の有声化を経て/b/に至ると仮定する。

21) ゼロ子音は、母音で始まる語彙を指す。ここでは便宜上、オノマトペ語彙の第1子音は「障害音とそれ以外」という基準で対立するものと考え、母音で始まる語を「ゼロ子音」と定義する。この語類はオノマトペにおいて、項目数としては障害音が第1子音のものより格段に少ない。

は無声の項目より稍少ない程度である。こうして語基の音素配列は自然に限定的な枠が嵌められ、(21) のように僅か3つのパターンに集約されるという結果に繋がっている。

以上のような形態論的+音韻的必然性から、日本語オノマトペ語彙の語基は一つの語形が多義を兼ねる要素が織り込まれていたと結論づけることができる。

さらに第三の見方として位置づけたいのが、第3節で擬音語／擬態語／比喩的用法という3つの区分に関して呈した筆者の意見である。すなわち、辞書では見出しとして立てる必要性から曖昧さを廃して、全ての語彙項目を少なくとも擬音語か擬態語いずれかに分類している。しかし第3節(11)で「ぶるん」という例を引いたように、擬音語と擬態語の境界は必ずしも明確ではない。寧ろ、「境界が明確である必要はない」と表現した方が適切かもしれない。境界を曖昧にしておくためには両方を統合して、例えば「オノマトペ」と定義する、というような方法論を採用することも可能であろう。「多義性の本質」という議論に踏み込むためには、「ぶるん」の擬音語用法「エンジンの始動音」と擬態語用法「一度震える様子」を統合して「物体が震える音／様態」と表現する方策が一つの可能性として考えられるであろう。この原義を細分化していく過程で擬音語／擬態語、あるいはそれぞれの範疇でS1, S2..., M1, M2, M3...と定義された、と考えれば説明できるのではないだろうか。尤もここで言っている「細分化」というのも通時的事実としての過程を指しているのではなく、言語学的仮構である。

擬音語の多義性は、データベースの定義では最大3である(SSS)。これは擬態語においては最大5であるのと比べれば、次のような推論が可能である。すなわち、擬音語は自然界の音を言語表現として模写する上で「具体的」でなければならない。言い換えれば一つの語基の形で、元が全く異なる音を表すのには無理が伴う。第4節(14)の例「ぴりぴり」ではS1からS3まで3通りの定義が与えられているが、これら音の発生源はそれぞれ笛、布や紙、ガラスである。材質としては軟の布・紙と硬の笛・ガラスという対比をさせることができるであろうが、発せられる音として「高音で、どちらかといえば聞き手に不快感を覚えさせるような」という共通点を指摘することができる。この点において、語基「ぴりぴり」の表現するS1からS3の音には、さほど大きな乖離が存在しているとは認められない。²²

これに対して同じく第4節(15)で擬音語+擬態語+比喩的用法混成の「がたがた」が挙げられているが、擬態語としての5つの定義は「ぴりぴり」よりも多様である。M2の比喩的用法を含めてこれら擬態語の定義の共通点を取って探れば「安定していない状態、無秩序」というような表現になるであろうか。これではいかにも「抽象的」という印象を免れない。ここで観察する限りにおいては、(17)で設定した「抽象性と多義性の連関」が実証されたようにも考えられるが、これは部分的な考察である。

第1節で、擬態語が主体であるり延長強勢擬容語の語基が抽象的である比率が高いという検証を行ったが、上述のように他の語形(語基がそのまま見出し形となっている語類)においても擬音語よりも擬態語語基の抽象性が高いということが裏付けられた。今後の方向とし

22) さらにM1とM2の定義においても、語基「ぴり」の表している様態は「不快感を与える」という面で共通していると考えられる。M1では電気や料理による刺激、M2では神経が過敏となって、その当人が受ける苦痛を指している。

ては、具体性－抽象性という尺度をより精密なものに高めていきたい。

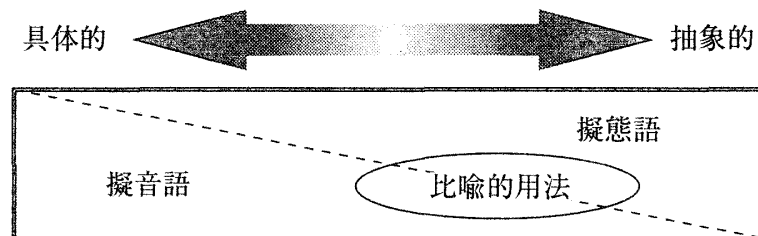
7. まとめ

この節では、本論文の結論としてここまで明らかになったことを総括し、今後の課題も併せて示しておきたい。

この論文では「日本語オノマトペ語彙には語基があり、オノマトペ標識の接辞によって辞書の見出し語形となる」というこれまでの前提を基として、語基の多義性という課題に迫ろうとした。本文でも言及しているように、「語基」「派生」というのは必ずしも書誌的なデータに基づいて裏付けられるような性質の過程ではなく、そのような言語学的仮構によって共時的なオノマトペ語彙 — 例えばKakehi, Schourup and Tamori (1996) に採録されている語彙項目 — を有機的に関連づける道具立てとでも規定すべき概念である。第6節で示されたようにオノマトペ語基の多様性には、語形という形態論的要素と、音象徴とも関連した音素配列的な条件が関係しているものと考えられる。

擬音語と擬態語の境界には曖昧な点が残ることは将来に解決すべき課題として、概括的に割り切れば「擬音語は具体的で、擬態語は抽象的である」という一般性を導くことが可能であるように思われる。更に比喩的用法は、定義上擬音語や擬態語の本来の意味より抽象的である。比喩的用法は擬音語と擬態語双方に関わるものとして、これら三者の相対的位置を単純化して以下のように図示してみる。なお、比喩的用法は擬音語と擬態語の境界線上を跨ぐという意味で意図的に線上の位置に配してある。

(22)



この図は擬音語と擬態語の具体性／抽象性について、極端に単純化したうえで相関的な関係を示そうと試みたものであるから、詳細については今後検討が必要である。しかし擬音語・擬態語・比喩的用法の3種類の相対的關係を示すことができたという意味で、今後の研究の糸口としたい。現段階では例えば、ほぼ全部が擬態語に分類されるリ延長強勢擬容語に抽象性の高い語基が多いなど、一定の傾向として指摘するに留める。

一方、本文中では解決が不明確なままで留め置かれている主な課題を列举すると次のようになる。

- (23)
1. 擬音語と擬態語の境界を明確化する必要があるか。あるとすればどのように行えばよいか。
 2. 語基の「抽象性／具体性」についての、客観的・数量的な尺度。
 3. 第6節(21)で分類されているような語形別に、抽象性に差はあるのか。つまり、特定の語形に抽象的な語基が多く偏在する、というような事実が存在するのか。
 4. なぜ「リ延長強勢擬容語」には抽象的な語基が多いのか。
 5. 特定の語形がオノマトペ語彙の識別に関してどの程度有効であるかという点についての類型論的または対照的な比較。

これらの課題は相互に関連しているので、今後も「語基－派生・接辞」という枠組みに依って立つ体系的な研究が必要と思われる。²³この枠組みによって筆者が明らかにしようと目論んでいるのは「日本語オノマトペ語彙の体系性」である。

最後に、諸言語において意味的な観点から「一般性」について対象を拡大して考えてみたい。オノマトペ以外の言語全般にも、量的な側面において「規範に従う大部分と少数の例外が存在する」という一般則が成立するように考えられる。それはオノマトペ語彙の体系性と共通である。言語が記号体系として社会的コードの機能を果たすためには、構成員に共通に理解されるような規範を備えている必要がある。そのような規範がなければ、同一言語の話者間の意思疎通が保証されないからである。オノマトペ語彙においてそのような「共通コード」とは、オノマトペ標識接辞によって代表される「無標のオノマトペ語彙」の形であろう。言語一般においては、共通コードを逸脱した部分は、流行語などの新語や「ら抜き表現」など言語の変化に至る過程である。オノマトペ語彙における例外とは、オノマトペ標識の接辞されない語基見出し語形などである。このように「閉じられた系」²⁴としてのオノマトペ語彙という範疇を通して言語全体像のあり方に迫るのは興味深い方法論ではないかと考えている。

参考文献

- Hamano, Shoko. (1998) *The Sound Symbolic System of Japanese*. Tokyo: Kuroshio.
- Kadooka, Ken-ichi. (1993a) "The Derivation Structure in Japanese Onomatopoeia." in *Proceedings of Kansai Linguistic Society* 13. Kansai Linguistic Society.
- 角岡賢一 (1993b) 「日本語の擬似オノマトペ」 笈・田守 (編) (1993) 所収.
- Kadooka, Ken-Ichi. (2000) "Morphological Patterns in Japanese and Chinese Onomatopoeia." in *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences*. Vol. 22. No. 1.

23) 例えば (23) 2. の「語基の抽象性と具体性についての尺度」が応用できれば、「相対的に擬態語よりも擬音語が具体性に富む」という仮説を検証することができる。

24) オノマトペ語彙は、内容語でありながら他の語彙範疇からは「独立」している。即ち、第6節で検証したような形態的要因により、他の語彙範疇からほぼ完全に区別される。さらに、新造語の参入する余地がほとんどない。最近の流行語から定着した唯一の例として「るんるん」が挙げられるのみである。このことは、日本語オノマトペ語彙という範疇が今後も「閉じられた系」であり続けられる可能性を示唆している。

- 角岡賢一 (2001a) 「日本語オノマトペ語彙派生過程における語基」『龍谷大学国際センター年報』第10巻.
- 角岡賢一 (2001b) 「日本語における『かな疑似オノマトペ』」『龍谷紀要』第22巻第2号.
- 角岡賢一 (2002a) 「日本語オノマトペ語彙の接辞」『龍谷大学国際センター年報』第11巻.
- Kadooka, KenIchi. (2002b) "Onomatopoeia Markers in Japanese." in *LACUS FORUM* 28, Linguistic Association of Canada and the United States.
- Kakehi, Hisao. (1981) "The Function and Expressiveness of Japanese Onomatopes." in *Bulletin of the Faculty of Letters, Kobe University*.
- 笥壽雄、田守育啓 (編) (1993) 『オノマトピア』東京：勁草書房。
- Kakehi, Hisao., Lawrence Schourup, and Ikuhiro Tamori. (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 黒田成幸 (1967) 「促音及び撥音について」『言語研究』50.
- McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- Mester, Armin A. and Junko Itô. (1989) "Feature predictability and underspecification: palatal prosody in Japanese mimetics." *Language* 65. 2.
- 那須昭夫 (1998) 「強調形オノマトペの韻律構造」関西音韻論研究会における口頭発表。
- Schourup, Lawrence. and Ikuhiro Tamori. (1992a) "Palatalization in Japanese Mimetics: Response to Mester and Itô." *Language* 70. 1.
- Schourup, Lawrence. and Ikuhiro Tamori. (1992b) "Palatalization of Japanese r in Relation to Theories of Restricted Underspecification." *Gengo Kenkyuu* No. 101.
- 田守育啓 (1991) 『日本語オノマトペの研究』神戸：神戸商科大学.
- 田守育啓 (2002) 『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』東京：岩波書店.
- 田守育啓、ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペー形態と意味』東京：くろしお出版.
- Waida, Toshiko. (1984) "English and Japanese Onomatopoeic Structures." in *Bulletin of Osaka Women's University, Studies in English*. Vol. 36.